

(英語版)

(アラビア語版)

令和五年三月

SF小説：「ナクバの東」(七十)

第三部：「キメラ」

七十 果てしなき時空間の旅 (2)

キメラが次に目覚めるのはいつの日か生存に適した環境にもぐりこんだ時である。それがいつ、どこであるかは誰にも解らない。否、解っている唯一の存在が宇宙のどこかにいる。その唯一の存在がキメラの眠りを解き、次なる活動の場所に向けて送り出す。そしてキメラは宇宙のどこかで新たな活動を始めるのである。

そのプロセスはすべて唯一の存在が支配しており、唯一の存在以外の目には突然或いは偶然に、起きた出来事としか思えない。その唯一の存在を地球のヒトは「神」、「ゴッド」、「アッラー」或いは「ヤハウエ」などと呼ぶ。しかし呼称は問題ではない。

地球を飛び出したキメラは、今、真の闇、絶対零度で無重力の宇宙空間をその唯一の存在のいる場所へ向かってまっしぐらに進んでいる。キメラの行方を地球から追跡することはできない。暗黒の空間で超微細なキメラを追うことは物理的、光学的に不可能であり、早晚その姿を見失う。

(続く)



荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)

前節まで：<http://ocininitiative.maeda1.jp/EastOfNakbaJapanese.html>